

第 33 回小豆島オリーブマラソン全国大会

右城 猛

まえがき

5月23日(日)に開催された「第33回小豆島オリーブマラソン大会」に、兼清さんと妻と3人で参加した。マラソン大会への参加は、昨年9月の「馬路村おしどりマラソン大会」(3km)、昨年11月の「坊ちゃん一緒にらんランRUN」(10km)、今年3月の「テレビ高知健康マラソン」(14km)に次いで4回目である。

オリーブマラソンには5km、10km、ハーフ(21.1km)の3種類があったが、3人ともハーフにチャレンジすることにした。

今年、私は還暦を迎えた。5月22日には満60歳の誕生日を迎える。オリーブマラソンは私にとって記念すべきイベントになるはずである。

この大会には、北は北海道、南は沖縄から5,357名の参加者があった。高知からは174名。コース別では5キロが919名、10キロが1,561名、ハーフが2,877名である。

マラソン前日

高松港13時30分発の土庄港行きのフェリーに乗る。高松港では、航海練習船「日本丸 世」が寄港しており、多くの見学者で賑わっていた。



高松港に寄港していた航海練習船日本丸



船首には手を合わせて祈る女性像「藍青(らんじょう)」が見られる



土庄行きのフェリーの甲板

坂手港でマラソン出場の受付を済ませ、田浦半島の先端付近にある「二十四の瞳の映画村」に行く。映画村の駐車場がハーフの折り返し点になっているので、コースの状況を調べる目的でもあった。アップダウンがあるのではないかと心配していたが、比較的フラットなので安心した。

練習で週に3回は9kmを走っている。日曜日には12kmを走ったこともあり、このコースなら完走できることを確信する。



オリympicマラソンのハーフコース



小学校の校庭。



「二十四の瞳」は、昭和 27 年(1952)に壺井栄が発表した作品で、昭和初期の岬の分校を舞台に大石久子先生と 12 人の児童がいたわり合い、助け合って生きていく師弟愛を描いた小説。

映画村には、昭和 29 年に木下恵介監督、高峰秀子主演で映画化されて全国的に脚光を浴びた作品を昭和 62 年に朝間義隆監督、田中裕子主演で再映画化されたときに建てられたオープンセットが保存されている。



教壇に立つ兼清さんと家内。独身時代に兼清さんは小学校で、家内は幼稚園で児童に教えていた。

教室の前の廊下側にはオルガン、中央に教壇、窓側に先生の机が置かれている。壁には一週間の時間割表、片仮名で書かれた五十音、「ヨクマナビ ヨクアソベ トモダチハ タスケアヘ」と書かれた張り紙がある。

80 年前の教室であるが、50 年前に私が見ていた光景とよく似ており、とても懐かしい。ここを訪れるのは 4 度目になるが、いつ来ても気持ちが安らぐ。

映画村には、菅原道真を祀った天満宮もある。学問と縁結びの神様であるので、娘の良縁、そして明日のマラソンでの完走を祈願する。

ホテルは土庄港の前のオーキドホテル。宿泊客のほとんどはマラソン大会に出場する人たちであった。



古い民家の昔懐かしい囲炉裏

大会当日

天気予報の通りで強い雨が降っていた。朝食を済ませ、7時10分にはランニング衣装に着替える。頭の中は完全にマラソンモード入っている。

会場の駐車場が満車になることが予想されたため、ホテルを7時30分に出発する。



マラソンモードに入った二人



完走した者だけが通過することが許されるゴールのアーチ。

会場に着くと雨脚が予想以上に強くなっており、肌冷えがする。天気が良ければハーフを完走する自信があるが、この雨の中では体力の消耗が心配である。明日から仕事のスケジュールがギリギリ詰まっている。明後日には、早朝から静岡へ実験のために出張に行かなければならない。万一風邪でもひくと大変なことになる。

一時は出場をキャンセルすることも考えたが、折角ここまで努力してきたキャンセルするのも悔しいので、10km コースに切り替えて走ることにした。途中でトイレに立ち寄ったもののタイムは1時間6分であった。

ハーフに申し込んであったのでゴールのアーチを潜ることはできなかったのが残念。昨年11月の坊ちゃん一緒にらんラン RUN は1kmを7分30秒、今年3月のテレビ高知健康マラソンは8分13秒であったので、今回の6分36秒には大満足であった。



10kmを1時間6分の自己ベストで完走し、誰もいない表彰台の前で、自分で自分を褒める。



大会会場では、小豆島特産のソーメンが無料で振る舞われており、食べ放題。完走した後の冷やしソーメンの味は格別。渡部和子さん夫婦。

(2010年5月28日記)